

誰もが安心して暮らせる地域づくりを

全国から関係者が参加 平成20年度雪崩防災シンポジウム

「中山間地域の防災と雪国のくらし」をテーマとした平成20年度雪崩防災シンポジウムが市文化会館で開かれました。国土交通省と秋田県が主催し雪崩災害への意識や対策の向上を図るとともに、誰もが安心して暮らせる地域づくりを進めることなどを目的として開かれたもので、全国の防災関係者や市民約400人が記念講演とパネルディスカッションで雪崩災害の危険と備えについて認識を深めました。その内容をご紹介します。



▲全国から関係者が参加した雪崩防災シンポジウム

開会行事でははじめに、中野泰雄国土交通省砂防部長が、「国土の半分は豪雪地帯に指定され、そこに国民の約2割が生活している。平成18年の豪雪でも全国で約100件の雪崩が発生し、15人の死者が出ている。雪崩対策を強力に推進し、国民の生命と財産を守るとともに、雪に強いまちづくりを進めたい」との金子一義国土交通大臣のあいさつ文を代読しました。

シンポジウムでは、秋田県民栄誉賞を受賞した秋田市出身のクライマー小松由佳さんの特別講演、国立秋田高専伊藤駿名誉教授による基調

講演、また、伊藤氏や岸部市長らがパネリストとして参加したパネルディスカッションが行われました。

特別講演 「自然の前では人間は無力」 クライマー 小松由佳さん

最初に登壇した小松さんは、2007年夏に世界第2の高峰・パキスタンのK2(標高8611m)に日本人女性として初めて登頂に成功するなど、世界の高峰に挑み続けている秋田市出身のクライマー。世界でも最も登頂が困難といわれているK2への挑戦の様子をスライドなどを使って興味深く語りました。

「K2は、多くのクライマーが挑戦し、2割以上の人が生きて戻れない困難な山。傾斜がきつ、このようにして登る。雪崩や落石も多く、冷蔵庫大の岩も落ちてくる。自然の前では人間は無力。ただ祈るしかない」と、その



講演する小松由佳さん
「と、その厳しさを紹介。登頂を果たしたときは、「地球が丸いんだと

いうことがよくわかった。しかし、登頂の感動は半分しかなかった。下山で滑落すると死が待っている。ベースキャンプに到着したときは、仲間と抱き合って喜び合い、生きていることを幸せに感じた」と述べ、「今生きていることはさまざまめぐり合わせの結果。これからも、自分ができる最高の生き方をしたい」と、K2登山の様子や登山を通じた自身の生き方について思いを語りました。

基調講演 「豪雪には周期がある」 伊藤駿名誉教授

続いて行われた基調講演では、伊藤駿国立秋田高専名誉教授が「秋田の豪雪周期と雪崩災害」と題して講演しました。伊藤教授は、過去の統計資料をもとに、年ごとの積雪の量などを比較分析し「統計的には、秋田県では11年に一度の割合で豪雪の年がある。暖冬の周期性はないが、豪雪には周期がある」と持論を展開しました。

さらに「豪雪にも積雪パターンがあり、冬期間平均的に積雪がある『停滞型』、徐々に積雪が増える『漸増型』、初期にドカッと積もる『初期大雪型』、1月下旬から2月上旬に積雪が多い

『中期大雪型』、分散して積雪がある『分散型』に分類される。県北では停滞型の年が多く、初期大雪型の年が極端に少ない。県南では中期大雪型が多く、停滞型が県北よりも少ない。秋田市は分散型が極端に多く、初期・中期大雪型は少ない」など、秋田県の中でも地域によって雪の積もり方が違うことに

因がある。雪の結晶レベルの特性による雪崩との関連性の研究も進められている」と雪崩のメカニズムについても研究が進められていることも紹介しました。

パネル討議 意見交換で理解を深める 豪雪・災害対策について

より、鷹巣では50センチ、横手では90センチの積雪があると雪崩が起る危険性がある」と県内でも雪の積もり方が違い、雪崩が起る条件も違うことを解説しました。

この後のパネルディスカッションでは、秋田魁新報社編集局次長の佐川博之さんをコーディネーターに、伊藤教授、岸部市長、藤里町社会福祉協議会事務局長の菊池まゆみさん、北秋田市阿仁地区猟友会会長の松橋光雄さん、中野国土交通省砂防部長、神居勝康秋田県河川砂防課長の6人がパネラーやコメントレーターとして豪雪や災害対策について意見を交わしました。

■雪に對しての防災教育も大切
伊藤名誉教授

「雪にも、あられや濡れ雪、氷に近い雪など種類がある。それらの積もり方によって、弱い層ができることも雪崩が発生する原因

はじめに「少子高齢化、限界集落、地域コミュニティの崩壊がささやかれています。秋田県が防災や減災をめざす地域の課題と対応について、どういう取組が大事か」との佐川コーディネーターの問いかけに対して、伊藤教授は「秋田は雪の降る地域環境。雪の積もり方、降り方をしっか

り身をもって対応していかなければならない。雪国でありながら雪のことをあまりよく分らない子どもが増えてきている。そういう意味では、雪に對しての防災教育を浸透させて行かなくてはならない。雪に親しみ、利用し、克服していかないと、防災にはつながらない」などと答えました。

積の広い地域なので、自治会を中心に防災組織をしっかりとしなくてはならない。平成19年の豪雨災害時には、国土交通省が実施した防災訓練が私自身とても役立つことを思うと、訓練はいかに重要であるかと考える。また、松橋さんのようなマタギの人たちの経験や情報を防災に活かすことができればとてもすばらしい。また、北秋田市には、森吉山をはじめたくさん観光資源があり、多くの人が観光に訪れる地なので、県や国と協力して防災に努めていきたい」と述べました。

松橋光雄さん・菊池まゆみさん
パネラーの松橋さんは「阿仁は雪が多く降る地域だが、道路の雪は行政が除排雪をしてくれるので、封鎖や孤立などの心配はほとんどない。しかし、どか雪が降った時は、隣近所のことと考えて、みんなが協力し合い雪よせをすることが大事」と意見を述べました。

神居・河川砂防課長は「これから県民の安心で安全な生活の確保を基本方針として雪崩対策の整備を積極的に進めたい。ハザードマップについては内容を充実させながら、周知できるように考えていきたい」などと県の方針を説明しました。

■日ごろの訓練で防災への備えを
岸部市長

岸部市長は「北秋田市は非常に面

中野・国土交通省砂防部長は、「国土交通省では大きな災害に備え、テックフォース(緊急災害対策派遣隊)という危機管理チームの体制を整っており、秋田県では秋田市と能代市に事務所がある」と災害時の活用を呼びかけました。

6人の識者が意見を交換したパネルディスカッション

